伊那での２年半

丹羽太左衛門先生が信州大学農学部に在勤しておられました２年半と、私が同学部畜産学科において３回生・４回生の専門課程を過ごした２年間とは、その時期がほぼぴったりと重なります。それも先生が主任教授をなされておられました「丹羽研究室」における繁殖学専攻の学生として、親身なご指導を受けながらであります。

私の大学生活４年間のうち前半の２年と、後半の２年とでは別の学校で学んでいる感がありました。普通、大学の先生は助手あたりからスタートするのに、丹羽先生の場合には「教授」からのスタートで、確かにこの事ひとつをとりましても、先生には都会の有名大学教授の雰囲気があったのです。

３年の頃の授業で、せんせが主宰されます「外書講読」は、結構楽しめました。外書と云いましても英語だったのですが、せんせのリードが楽しかったですね。それもその筈、後で知ったのですが先生は信大へ赴任されます直前迄、米・ミネソ

タ大学の客員研究員でおられたのです。そして先生のアメリカ仕込みは此の他、ボーリングなどにも見られるのですが、紙面の都合上割愛いたします。

4回生の秋頃、ソ連のハリコフ研究所からDr.Ostaska他2名の研究者が丹羽研究室へ視察に見え、主に研究室と、隣接する豚舎で視察及び研修をされてゆきました。僕達学生は研究室の大掃除など大変な面もありましたが、それよりも一地方大学へソ連の研究者が来訪し、その「特別講演」を聴講出来たと云う現実に、大いに驚き大いに感激致しました。

先生は、その頃も農林省や政府の仕事、そして畜産や養豚学会でのお仕事にと超多忙で、スケジュールを遣り繰りし乍、月に数回は上京をされておりました。そしてまた市内の書店には発行所の異なる先生の御著書が背表紙を見せて並べられており、書店の店主でさえ“田舎の大学にこの様な高名な先生が・・”と、驚いていたのではないかと推察致します。

国立二期校であります伊那の信州大学農学部には建学以来、

例えますと同族会社のような、ゆったりとした平坦な時間が流れていたのではないでしょうか。そこへ国内はもとより“世界の Niwa”としても著名な新人教授が登場してきて、正に八面六臂の活躍を始められたのです。
今迄、大学を運営してきた教授会からすれば正に晴天の霹靂、黒船到来にも比肩される出来事だったのではと思量します。

結局丹羽先生は、たったの2年半で、担任学生達の頬に涙の跡を残し、信州・伊那の地を去られます。
そしてご自身の青春時代の学び舎でもあります、岩手大学へ赴かれたのです。東京からは随分遠くなり大きなご苦労がおありだったでしょうが、ご家族のサポートも得ての大活躍で、その後の数々の研究業績や、はたまた褒章や叙勲に繋がってゆきます。流石の丹羽先生! 近江・湖北の人としての面目躍如と云う処で御座います。

尚、「黒船」が去った後の信大農学部がどのようなになっていったのか、私は寡聞にして知りません。　平成29年5月
竹村一郎　(信大:昭和41年3月卒業)